

機関番号：12601

研究種目：特定領域研究

研究期間：2005 ～ 2009

課題番号：17083008

研究課題名（和文） 杭州湾岸地域における都市・建築・歴史の構造

研究課題名（英文） The study of the city, architecture and history in the bay area of Kosyu, China

研究代表者

藤井 恵介 (FUJII KEISUKE)

東京大学・大学院工学系研究科・教授

研究者番号：50156816

研究成果の概要（和文）：『大宋諸山図』の調査研究と中国の古建築現地調査は、日中の建築技術の移植の検討と、日中両国の建築様式の再定義の試みである。杭州と杭州湾岸都市の調査研究では、中国都市史の変遷を、農業=遊牧境界地帯に接する内陸都市網から沿海地帯に接する都市網への転換として分析した。「都市寧波」の内部の住宅地の調査研究では、水との共生、中庭の利点の活用によって快適な住環境を構築する伝統を明らかにした。

研究成果の概要（英文）： The conclusion are as follows: (1)The study of the document named DAISO SHOZANZU with actual visits of Chinese historic architecture guides redefinition of the architectural style both of the Japanese and the Chinese. (2) The main area of China became to the cities network in Kosyu bay area from that around Sean. It is a new recognition of Chinese city history. (3)Chinese city houses held two characteristics to enjoy comfortable conditions, one was to commune with water, another was to have courtyard.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	4,600,000	0	4,600,000
2006 年度	4,600,000	0	4,600,000
2007 年度	4,600,000	0	4,600,000
2008 年度	4,600,000	0	4,600,000
2009 年度	4,600,000	0	4,600,000
総計	23,000,000	0	23,000,000

研究分野：建築史

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：禅宗、五山、寧波、環境、江南、住宅、水辺、五山十刹図

## 1. 研究開始当初の背景

杭州湾岸地域の研究は、近年、急速に展開してきているが、歴史学・建築学の方法と、人文・社会・自然科学の学的伝統を融合する分析は、まだ極めて少ない。本研究は、研究課題からいっても、方法論的にいっても、従来にない新しい試みである。

## 2. 研究の目的

(1) 一つの経済・文化圏をなす杭州湾岸地域、とくに南宋の都の臨安とその周辺の諸都市—紹興・寧波・嘉興を主な対象にして、人(ヒト)の活動と都市・建築・環境の関係を明らかにすることが、本研究の目的である。南宋期(1127~1279)の都の臨安は、南宋王朝の都として繁栄の極をむかえたが、臨安

(杭州)の都市そのものは、華南の中核都市として、紀元前から現在に至るまで、中国の政治・経済・文化の中心地の一つであり続けた。そして対外的な交流も大変な盛況を呈した。その臨安(杭州)と杭州湾岸沿いの諸都市を対象とすることで、長い時間軸の中で、都市・建築の関係を分析することが本研究のねらいである。

近年、杭州湾岸沿いの諸都市は、都市史・建築史・環境史の研究において、さまざまな研究分野が分析の対象とするもっともホットな地域の一つとなっている。その理由は、この地域が、現在の中国沿岸部の経済発展をささえる最重要地の一つであると同時に、歴史文献と実地調査記録が豊富に残存しており、多様なアプローチが可能な地域であることによる。また、中国地域内の問題と同時に、対外的には、多くの文物を輸出するなど、朝鮮・日本との交流が最も盛んな地域であって、特に建築においては南宋時代以後、禅宗僧侶の朝鮮、日本への移動とともに、中国で発達した特有の建築が輸出されており、特に焦点をあてるべき大きなテーマとなっている。

すなわち、本研究は、近年の杭州湾沿岸地域の研究蓄積を最大限に活用し、人文・自然科学研究のフロンティアとなっている都市・建築・環境の関係を、(a)生態環境と都市構造との相関性の程度と、(b)その関係の変化の具体像の解明と、(c)対外的な文物の移動を主にして、前近代から近代にかけての3000年をこす時間軸の中で明らかにしてゆく予定である。従来の研究の蓄積と、各研究者の個人研究の経験を活用することで、所定の期間内に所期の研究成果を挙げ得ると確信している。

(2) 杭州湾岸地域を都市と建築と環境を広く捉える本研究は、調整班B「現地調査」に組み込まれている。人文学・社会学・工学的調査研究を総合するに、もっともふさわしいと思われる。

(3) 本研究は、歴史学専攻と建築学専攻の2つの異なる研究分野の研究者が、杭州湾岸地域という同じ地域を対象に、それぞれの研究分野の分析視角をふまえて、総合的に分析するものである。特定の地域の多様な側面を浮き彫りにするためには、異なる学問分野を融合させて地域の履歴の多層性を明るみに出す必要がある。その意味で、本研究組織は、人文・社会・自然科学の研究者が一同に会することで、方法的にも新しい学問の創造を強くめざしており、従来の学問分野を超えた、より複合的で現実的な研究成果を出しうる。

### 3. 研究の方法

本研究は、フィールド調査と文献調査を同時に実施することを特徴としている。都市・建築史学においては、実際に都市・建築を調査して、その現地で獲得された情報を基にして、考察を進める方法を蓄積している。また同時に、文献調査を実施して、現地のフィールド調査で得られた情報と重ねて、立体的に歴史像を描く方法をも蓄積している。今回の研究においても、この方法を最大限に活かす努力を行った。

### 4. 研究成果

(1) 『大宋諸山図』および『五山十刹図』の調査と研究

『大宋諸山図』(東福寺蔵)および『五山十刹図』(大乘寺蔵、石川県立美術館保管)の調査および内容の検討を行った。これら絵図は淳祐七年(1247)から宝祐四年(1256)のあいだに中国で筆録されたとみられるもので、南宋時代の寧波と周辺に位置した当時の五山の実態をうかがうことのできる最重要資料の一つである。径山寺・天童寺・靈隠寺といった南宋五山の伽藍配置のほか、建築の架構や儀礼の様子、什器の詳細などを緻密に図化している。中国禅院の建築がどのように日本に将来されたのか、明らかにすることのできる史料が少ないことから、建築史学の観点からみてその研究上の価値は極めて高い。本史料の来歴や特徴の検討を行うため、2007年度に都城建築班主催のワークショップ

「『大宋名藍図』・『五山十刹図』・『大宋諸山図』をめぐる」を開催し、研究史を確認し、今後の研究展望を得た。その後、継続的に研究会を開き、多数の建築や什器などの絵図を詳細に分析した。この成果は2010年度に『東アジア海域叢書』として刊行する予定である。(藤井恵介、角田真弓、協力者 野村俊一・韓志晩・鈴木智大・温静)

(2) 「明治—昭和初期、中国調査に関する写真資料データベース」の作成

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵の『芸術参考写真帖』と呼ばれる印画紙プリントを貼り付けた写真帖のうち、中国調査に関する写真のデータベース作成を行った。写真帖制作の経緯は不明であるが、中身の大半は、当専攻の前身である東京帝国大学工科大学建築学科の教授であった伊東忠太・塚本靖・関野貞の国内外調査時に撮影された写真であり、この中に戦前期の中国の寺院・宮殿・陵墓調査写真が約1,400点含まれる。これらの写真のうち、公開されているのは関野貞・常盤大定『支那文化史蹟』(全十二巻)掲載のごく一部であり、多くが未公開のままとなっていた。写真の対象となるこれらの史跡は、相当数が破壊あるいは整備され

ていて、旧情を知る資料が集中的には管理されておらず、それを知ることが困難な状況にある。本写真群は当時の姿を写す重要な史料であると考え、データベースを作成した。検索キーワード、時代、建設年、撮影場所、被写体種類であり、日本語および中国語が使用可能である。このデータベースは日本や中国のみならず、広く研究者、関係者への公開を進めることで、今後の中国研究の可能性を高めたと考える。(角田真弓、藤井恵介)

### (3) 中国の歴史的建造物を対象にした現地調査

南宋五山が位置した寧波や杭州をはじめ、中国各地に残存する仏堂や仏塔などの歴史的建造物を現地調査した。撮影記録や実測調査、聞き取りなどからデータベースを作成し、各建造物にみる特徴を検討した。とくに組物の意匠や建築架構にみる制作理念、建築の宗教的意味、伽藍の立地などを比較検討し、それらが日本へどのように伝達したのか、文献史料と照らし合わせながら多角的に考察した。調査地域は浙江省のほか江蘇省、福建省、山西省、河南省であり、浙江大學・中国人民大学・上海同濟大學・厦門大學などと協同しながら調査を進めた

### (4) 中国全体における杭州と杭州湾岸の諸都市の性格の分析

都城建築班に属した筆者の5年間の研究課題は、杭州を核とする杭州湾沿岸の都市網の歴史を中国都市史の中に位置づけることであった。もともと、華北の農業=遊牧境界地帯の都市網の研究を専門としてきた筆者にとって、杭州湾岸の都市網の調査は、中国都市史の奥深さと幅広さを学ぶ絶好の機会となった。2007年3月と2008年4月の2回の杭州・寧波調査は、1980年代における西安留学以来ずっと華北の都市を中心に調査してきた筆者に、もう一つの中国を実感する契機となった。

筆者が長年親しんできた西安と関中平野の諸都市は、モンゴル高原や中央アジア、チベット高原との交通と外交関係を軸に、農業=遊牧境界地帯に隣接する「陸の都」である。西安(長安)は、ユーラシア大陸の乾燥地帯のオアシス都市と連結する内陸シルクロードの要衝だった。

それに対して、杭州と杭州湾岸の諸都市は、水郷と運河に浮かぶ「水の都」であり、渤海湾沿岸都市や朝鮮半島、日本列島、東南アジア等と海路でつながる沿海地帯の要衝である。そして、関中平野と杭州湾岸の二つの地域は、中国史の前半と後半を代表する経済・文化地域であり、中国大陸の都市網が、内陸都市網から沿海地帯の都市網に比重を移行させていく中で、中国大陸の都市網における

各々の比重を転換させるのである。

二つの異なる地域を調査した経験を契機に、中国都市史の変遷を、農業=遊牧境界地帯に接する内陸都市網から沿海地帯に接する都市網への転換として分析することが、この5年間の筆者の研究課題となった。その課題にそって、妹尾達彦編『都市と環境の歴史学』(第1集-第3集[増補版]、東京:中央大学文学部東洋史学研究室、2009年3月)等を刊行し、その他4篇の論文を最終年度の主な成果としてまとめた。(妹尾達彦)

### (5) 寧波の都市空間の独自性の分析

高村の研究テーマは、「都市寧波」の住宅地の変遷過程と住宅の空間構成を現地調査によって詳細に分析し、寧波の都市空間の独自性を明らかにすることである。とくに、寧波地域の環境・文化と海域世界の関係性を解き明かすためには、まず寧波の都市と建築の環境を空間的かつ歴史的に捉え、現地調査を実施しながら、いかなる変容を遂げたのか、またその時代の都市的・社会的特性がどのように反映されて成立したのかを具体的なモノを通して明確にすることが必要であると考えた。

そこで、2006年度および2007年度前半には唐宋に起源を持つと推察される永寿街地区、2007年度後半と2008年度前半には19世紀後半に開発された近代の広仁街地区、2008年度後半と2009年度には18世紀の月湖の埋め立てによって成立した月湖地区をそれぞれ調査し、類型化とともに比較分析を行って、個々の独自性を見出した。この三つの異なる時代に形成された住宅地の構造および住宅の空間構成についての分析は、3年間の成果として高村雅彦『『都市寧波』の空間構造に関する史的研究—官紳区と商工区の変容過程—』(審査付論文)に発表した。

最終的な成果として、まず都市環境に関して、現在の空間構造と古地図や文献史料などを使って、①儒教と風水による中国都市ならではの空間構造をもち理念としての都市環境の整備が行われてきたこと、②唐末から南宋のもっとも古い官吏による永寿街の街区形成では水路と街路樹の整備による住宅地の環境改善が実施されたこと、③明末清初の湖の埋め立てによる住宅地開発では水との環境共生や方位よりも周辺環境との結びつきに重点を置く思想が見られることを指摘し、都市と住宅地整備の歴史的変遷を明らかにした。

次に、住環境の具体的な整備に関して、現地での実測調査により、①中庭建築の価値が自覚されてそれが常に継承されていること、②永寿街や月湖地区では時代を超えても常に水辺の景観を活かした住宅地がつけられ、③その一方で水質地盤に対する構法の変化

が見出せること、④都市化にともなう住宅の空間構成の変容が広仁街の中庭を中心とした閉鎖性の追求として現れたことを指摘した。

以上のように、「都市寧波」の住宅地の変遷過程と住宅の空間構成について、①水面の多い都市を開発しながら、水と共生する快適な環境を築き上げてきたこと、②いつの時代も住宅の中庭が持つ利点を活用・自覚しながら、時代の要請に応じて快適な住宅地を形成してきたことを総じて明らかにしてきた。その際に、③単に古地図や文献史料の分析だけでなく、実測や聞き取りによる現地調査を行い、それによってまず最初に現在の空間特性を把握し、次に時間軸を入れながら形成の過程をさかのぼるフィールドワークの方法論がどの分野でも有効であることを示すことができたと確信している。(高村雅彦)

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

①妹尾達彦「長安、礼儀的都—以円仁《入唐求法巡礼行記》為素材—(栄新江主編《唐研究》第 15 号、北京：北京大学出版社、2010 年

②高村雅彦「『都市寧波』の空間構造に関する史的研究—官紳区と商工区の変遷過程—」『東アジア海域交流史 現地調査研究—地域・環境・心性—』第 3 号、2009 年

③妹尾達彦「北京の小さな橋—街角のグローバルヒストリー—」関根康正編『ストリートの人類学 国立民族学博物館調査報告』81、pp95-183、2009 年

④妹尾達彦「中国城市建筑史研究在日本」『劉敦楨先生誕辰 110 周年紀年暨中国建築史学史研討会論文集』南京：東南大学出版社、pp117-125、2009 年

⑤妹尾達彦「胡人与漢人—「異人買宝譚」与漢人認識之變遷」黄心貴主編『空間与文化場域：空間之意象、实践与社会的生産』台北：漢学研究中心、pp107-134、2009 年

⑥野村俊一「栄西の建築造営とその背景—東大寺鐘樓の意義をめぐって」『アジア遊学—日本と《宋元》の邂逅—中世に押し寄せた新潮流—』第 122 号、2009 年

⑦藤井恵介「日本人は中国建築システムをどう受け止めたか」楼慶西著、高村雅彦監修『中国歴史建築案内』TOTO 出版、pp374-385、2008 年

⑧高村雅彦「『都市寧波』の空間構造と住宅地の形成過程—空間・時間・変容—」財団法人東方学会第 57 回全国会員総会シンポジウム「都市・墓・環境をめぐる歴史的空間—文理融合による日中比較」配布資料、pp11-20、

2007 年

[学会発表] (計 1 件)

①原島泰司・高村雅彦「中国・寧波における月湖住宅地の変遷過程」『日本建築学会大会学術梗概集』(東北)、2009 年、仙台

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

なし

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

藤井恵介 (FUJII KEISUKE)

東京大学・大学院工学系研究科・教授

研究者番号：50156816

##### (2)研究分担者

妹尾 達彦(SEO TATSUHIKO)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：20163074

(H17~H20)

高村 雅彦(TAKAMURA MASAHIKO)

法政大学・工学部・教授

研究者番号：80343614

角田 真弓(TSUNODA MAYUMI)

東京大学・大学院工学系研究科・

技術専門職員

研究者番号：20396758

(H19~H21)

野村 俊一(NOMURA SHUN'ICHI)

東京芸術大学・美術学部・助手

研究者番号：40360195

(H19~H20)